

『毒グモ騒動の真実』に関する資料について 池田博明

池田博明，2012．『毒グモ騒動の真実』ないものねだり．談話会通信，(136):10-13.

池田博明，2012．『毒グモ騒動の真実』補足解説．Kishidaia，(101):**~**.

池田博明，2012．『毒グモ騒動の真実』書評．<未発表>

談話会通信，2012，(136):10-13.

『毒グモ騒動の真実』ないものねだり

池田博明

全国農村教育協会から，清水裕行・金沢至・西川喜朗著『毒グモ騒動の真実』（2012年7月24日発行，1800円）が出版されました．副題「セアカゴケグモの侵入と拡散」と，帯の惹句「あれから約十五年，セアカゴケグモは列島各地で生息域を拡大し，別種のゴケグモも発見され，現在，二十三都道府県で五種が確認されている．マスコミ報道は絶え，毒グモの危険は去っていない」が本の内容を表しています．読みながら，1995年~1996年当時を思い出しました．そんな私の所感であって，書評ではありませんが，この本は労作でありながらも，修正加筆を必要とする箇所が多いと思いました．別にKishidaia，101号に欠落領域の補足解説を投稿しましたので，そちらを参考になさって下さい．清水氏によると再版の機会があれば修正補足の可能性もあるそうです．

1995年11月24日に共同通信による情報が新聞記事になって以後の「毒グモ騒動」には東京クモ談話会や三重クモ談話会，中部蜘蛛懇談会，日本蜘蛛学会の会員の皆さんもいろいろな形で対応されました。

この本の第1章「セアカゴケグモの発見と波紋」には発見の経緯と1995年末までの経過が当事者（西川・金沢）からの証言なども元に記述されていて参考になります。ただ，記録が大阪に偏っており，ほとんど同時にセアカゴケグモが発見された当時の三重県四日市の状況や三重クモ談話会の会員の努力や適切な対策は資料が公表されている（太田，1996；三重クモ談話会，1996；1997；1998）にもかかわらず，記述や評価が不十分だと感じました。神奈川県横浜市のハイイロゴケグモの発見の経緯（Ono，1995；池田，1997）や，1995年12月16日の東京蜘蛛談話会有志による横浜市ゴケグモ調査の活動についての記述は全く書かれていません。また，小野（2002）にはテレビ取材や放送と対策に関してオーストラリアの観光局の関与などの重要なことが報じられていますが，第1章にも第4章にも取り上げられていませんでした。

第3章「1996年以降の分布拡大」は毒グモが認知されてから今日までのゴケグモ報道の経過の記録で，この本のもっとも重要な部分です。清水氏はウェブ上に「ゴケグモ情報センター」を開設して（開設日時は不明。親サイトの昆虫処理情報研究会は2006年開設），情報の収集・整理に当たっており，ウェブ情報を鵜呑みにすることなく確認していて，信頼に足る記録となっているものと思われます。ゴケグモ情報もニュース性が低くなったため地道な記録は大変だったと推察します。新たな地点での発見を役場に届け出たが，もはや問題にされなかったという事例も聞きました。完全を期すのは難しいようです。

第2章「ゴケグモとはどのようなクモか」は，ゴケグモの生物学的解説および毒の説明ですが，ゴケグモ類の生態記述は参考文献の明示がされていません。また，日本でのセアカゴケグモやハイイロゴケグモの生態では，クモ同好会誌などに発表されている詳細な記録（特に三重クモ談話会，1996；1997；1998）やセアカゴケグモ報告書（ニュージェック，1997；大阪府立公衆衛生研究所，1998）のデータを取り上げるべきだったのではないのでしょうか。池田（編）『クモ生理生態事典』のセアカゴケグモやハイイロゴケグモの記述もまったく参考にされていません。「セアカゴケグモの学術文献は少ない」と断言されていますが，洋書や英語の参考文献は多すぎて整理がつかないほどあります。

毒性に関する箇所では，ゴケグモ毒が他のクモ毒と混じって解説されています。どこまでがゴケグモの毒なのか不明瞭な書き方になっています。たとえばネフィラトキシンは毒素名からわかるようにネフィラ（ジョロウグモの）トキシン（毒素）であって，ゴケグモ毒ではありません。このような誤解をうむ記述は西川・金沢（1996）も同様で，「昆虫担当学芸員協議会ニュース」第18号（2009年）も同文でした。ゴケグモが脊椎動物だけでなく昆虫の神経-筋接合部に働く毒素も持っているというのは事実ですが，その毒素名はラトロ（ゴケグモの）インセクト（昆虫の）トキシン（毒素）というタンパ

ク質毒素のはずです。ゴケグモ毒素の解説や医学的な解説は、大利昌久やユーゴスラビアのマレティック、川合述史、中嶋輝躬などが詳細にしていますし、池田（2009）もあるのですが、それらは参考文献には挙げられていません。川合の一般書『一寸の虫にも十分の毒』（講談社、1997）は「毒グモの日本上陸」から始まる傑作なのですが、参照されていません。大利・池田（2006；2006）や大利・新海・池田（2006）は参考文献には挙げられていますが、まったく引用されていません。

第4章「社会現象としての「毒グモ騒動」」にはゴケグモ対策が書かれています。「クモ有識者は」「識者は」「クモ研究者は」といった表現で意見が一般化され、ときには批判されているのですが、著者らも「クモ有識者」なのに、他の誰のことを指しているのか、私には心当たりがありませんでした。当時、日本蜘蛛学会会長だった西川喜朗氏はもとより、庶務幹事の吉田真氏は学会で「ゴケグモ対策委員会」を立ち上げたり、情報収集に努めたりと本来の仕事そっちのけで苦労されたはずですが、なにひとつ記述されていませんし、評価もされていません。小野（2002）の「クモ全般の情報を提供するために、プロ、アマを問わずクモの研究者がみな狩り出されることとなった。多くの蜘蛛学会の会員がマスコミや地元の住民、そして行政の質問に答えたり、手弁当で調査に参加した。とくにアマチュア研究者がはたした役割には大きいものがあった」という評価こそ正しいものでしょう。このような評価が既にあることさえ記述されていません。不思議です。

また、1996年の日本蜘蛛学会の東京都国分寺市での第28回大会では、「ゴケグモを中心とした外来クモの生物学」と題してシンポジウムを開いています。クモ学会員のゴケグモに対する正確な知識をというニーズに応えた企画で「毒グモ騒動」の渦中にあったクモ関係者が企画・立案に関わっていました。シンポジウムの内容と要旨は日本蜘蛛学会会誌 *Acta arachnologica*, 45(2):187-188. に掲載されていますが、このシンポジウムのことも記述がなく、評価もされていません。各個人の講演要旨は参考文献に挙げられていますが記述には生かされていません。また、セアカゴケグモの毒に関する検査では1996年にラトロトキシンが検出されていますが、この本には「衛生研究所による安全論」が中心で、そのことがきちんと書かれていません。

第5章「外来生物としてのゴケグモとの付き合い方」では、セアカゴケグモが身近なクモとして定着した現在は妥当な提案がされていると思います。一般の人もクモの生態をよく知ってスズメバチと同様の付き合い方を学ぶべきだろうという提案です。ただし、同じ提案は当初からクモ関係者がしていたことをきちんと評価すべきではないでしょうか。証拠資料も証言も公表されています。

第6章「クモと日本人」は壮大なテーマですが、素人の論説はファンタジーです。古代日本の音韻学や言語学に通じていない素人が論じても見当はずれになりがちです。著者にはそれなりの見解があるでしょうし、ファンタジーを論ずる自由もあるとは思いますが、私には例えば『古事記』ではつちぐもを「土雲」と表記している。発音がひと

り歩きした結果であろう”(146頁)という推論がどうして成り立つのかが理解できませんでした。ひとり歩きもなにも、『古事記』の和語の漢字表記は最初から音に当てた当て字ですから、橋本進吉の名著『古代国語の音韻について』(岩波文庫)を読んでみて下さい。

参考文献とその<内容>

池田博明,1997.神奈川の毒グモ,ハイイロゴケグモの例.かながわの自然,(59):34-35.<ハイイロ発見の記録>

池田博明,2009.クモの毒を科学する.Biophilia,5(1):1-5.<医系理科系大学1~2年生用のクモ毒の解説>

大阪府立公衆衛生研究所,1998.セアカゴケグモの調査報告書.大阪府立公衆衛生研究所.<詳細な報告>

太田定浩,1996.四日市で発見されたセカゴケグモの現状.中部蜘蛛懇談会研究会資料.<初動の記録>

大利昌久・新海栄一・池田博明,1996.日本へのゴケグモ類の侵入.Med.Entmol.Zool.,47(2):111-119.

大利昌久・池田博明,1996.毒グモとその毒(1).現代化学.(301);54-60.

大利昌久・池田博明,1996.毒グモとその毒(2).現代化学.(302);30-36.

池田及び大利の関連資料は1998年からウェブ「SPIDER DATA」上に公開されている

小野展嗣,2002.クモ学.東海大学出版会.<第8章に「セアカゴケグモ事件」>

川合述史,1997.一寸の虫にも十分の毒.講談社.<無類に面白い本で必読>

ニュージェック,1997.都市地域における移入動物生息実態等調査-セアカゴケグモをモデルケースとして.環境庁自然保護局・ニュージェック.<日本蜘蛛学会ゴケグモ対策委員会の最終報告書を兼ねた.大阪が主.>

西川喜朗・金沢至,1996.セアカゴケグモの発見とその毒性に対する対策.環動昆,7(4):214-223.

三重クモ談話会,1996.四日市のセアカゴケグモを追う.しのびぐも,(24);8-22.<太田1996の改稿>

三重クモ談話会,1997.その後の四日市のセアカゴケグモ.しのびぐも,(25);17-25.<生態記録>

三重クモ談話会,1998.四日市のセアカゴケグモの野外調査を終えて.しのびぐも,(26):11-20.

Ono, H., 1995. Records of *Latrodectus geometricus* (Araneae: Theridiidae) from Japan. Acta arachnol.44(2):167-170.<ハイイロゴケグモの発見に関する記録.池田(1997)と重なる>